教育研究業績書

2025年05月07日

所属： 日本語日本文学科　　資格： 教授　　氏名： 佐藤　勝之

研究分野	研究内容のキーワード
機能的テクスト分析	言語機能、テクスト、選択体系
学位	最終学歴
文学修士	立教大学大学院 文学研究科 英米文学専攻 修士課程 修了

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1.「初期演習」における学習成果のプレゼンテーション	2013年10月～2014年01月	1年次必修の導入的授業である「初期演習」において、日本語・日本文学・日本文化に関係するテーマを小グループごとに決めさせ、課外での自主的な学習成果をOHCやパワーポイントを利用しながら発表させた。必ず一人一人が口頭発表する形にし、発表内容とともに表現のしかたを評価に組み入れた。
2 作成した教科書、教材		
1.韻文による物語の展開の構造―竹内まりや「駅」―	2013年11月	広く日本文学・日本語学を専攻する学生が受講する「談話研究論」において、優れた現代大衆音楽の詩曲である竹内まりやの「駅」を、テクストの韻律的・構造的側面から分析したものを、楽曲とともに再評価した。特にテクスト構造については、情報の集約および結束性という機能言語学的観点に注目するようにした。
2.「おうむのるすばん」の談話構造の再検討	2012年11月	「談話研究論」の教材として、永野(1986)に分析されている物語「おうむのるすばん」を、選択体系機能言語学の観点から、状況における複数の参与要素の関係性とテクスト展開における結束性、とりわけ「舞台」への「登場」・「退場」という視点で再検討した。
3.変形生成文法の基礎	2011年06月	広く日本語学・日本文学を専攻する学生のための授業「言語学」の導入的教材として、郡司(1987)・風間他(1993)等を参照しながら、変形生成文法の基礎と日本語分析への応用を示した。あわせて、これによって浮かび上がる学校国文法の「文節」論、「主語」論等の問題点を指摘した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1.教員免許	1987年05月31日	資格：高等学校専修（英語） 資格番号：昭六二高一普2147号
2.教員免許	1984年03月31日	資格：中学校1種（英語） 資格番号：昭五九中一普第2258号
3.教員免許	1984年03月31日	資格：高等学校1種（英語） 資格番号：昭五九高二普第2300号
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.ことばの学びⅠ・Ⅱ	単	2023年3月31日	大和出版印刷	主に中学生および高校生を対象に、言葉の仕組みと働きについて考え、論理的思考力とコミュニケーション力を養うための自主学習材

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
				として編んだものである。「ことばの学びⅠ」は、中学校国語教科書の言葉に関する学習材を援用しながら、言葉と出来事とその伝え方について意識化を促すものである。「ことばの学びⅡ」は、言葉そのものの成り立ちと働きについて一部英語と比較しながら考察を促すものである（全58頁）。（日本学術振興会科学研究費助成事業；2017年度基盤研究（C）17K04829）
2.Mapping Genres, Mapping Culture. Japanese texts in context	共	2017年12月	John Benjamins Publishing Company	Elizabeth.A.Thomson（他編）の本論文集 Chapter 7、Kundoku-bun : A hybrid genre in Japanese literature (Katsuyuki Sato) を担当。漢文訓読が日本の文化のコンテクストに占める位置、テクストとしての訓読文の漢文、和文との関係性を、選択体系機能言語学(Systemic Functional Linguistics;SFL)の観点から整理するとともに、漢字の構成原理に遡って漢文訓読がなぜ可能であったかを藤堂(1963)等に基づいて説き、さらに、SFLの観点から若干の漢文テクストと訓読文テクストの比較を行った。(pp.169-190)
3.ことばは生きている―選択体系機能言語学序説―	共	2006年05月	くろしお出版	龍城正明（編著者），堀　素子，船本弘史，角岡賢一，小林一郎，佐々木真（共著者） 本書は、M.A.K.Hallidayの主唱する選択体系機能言語学(Systemic Functional Linguistics)の基本的な考え方を日本語で解説したものである。担当した第2章「ことばを使う　テクストと社会の関係」では、テクストが文化と状況のコンテクストの具現であることを、ジャンルとジャンル構造、言語使用域（活動領域・役割関係・伝達様式）といった術語を用いながら、テクスト例を挙げて解説した。(pp.19-36)
2 学位論文				
1.The Notion of "Given/New" and its Function in Topicalization and Left Dislocation	単	1987年01月	A Thesis Presented to the Faculty of the Department of English, Rikkyo University; In Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree, Master of Arts.（立教大学文学修士学位請求論文）	第1章では、Mathesius(1975), Firbus(1966a,1966b), Halliday (1967/68,85)の機能主義的言語観による先行研究を概観した。第2章では、Prince(1981a,1981b)のgiven/new informationを批判的に捉え直し、新たな分類を提案した。第3章では、topicalizationおよびleft dislocationの文構造を、given/newの情報論的観点から再解釈し、多様なテクスト例からこれらの文構造の談話機能的特徴を捉えて整理した。（全90頁）
3 学術論文				
1.漢字と漢文訓読の原理―漢字の構成から考える―	単	2016年03月	『武庫川女子大学　言語文化研究所年報』第26号（武庫川女子大学　言語文化研究所）(pp.63-79)	本論は、漢文訓読という外国語解釈・翻訳システムを成り立たせている原理を、漢字の構成法を再検討することによって明らかにし、また文言文と訓読文の解釈の相違を、選択体系機能言語学(SFL)の枠組を用いて捉えようとしたものである。
2.ジャンル・サブタイプ〈歌詞〉の事例研究―竹内まりや「駅」のテクスト分析―	単	2016年03月	『日本語教育レポート』第14号（武庫川女子大学文学部日本語日本文学科日本語教育研究会）(pp.1-8)	〈芸術的ジャンル〉のサブタイプである〈歌詞〉について、竹内まりや作詞作曲の「駅」を一事例として取り上げ、歌詞テクストの展開における状況・語り手／認識主体・認識対象の変化、語り手の認識・情動に伴う対象の捉え方と呼称の変化、およびテクストの簡潔性―語句の省略と反復回避、名詞化と埋め込み構造―などについて論じた。
3.教科書は教育的イデオロギーを超えられるか―事例研究『走れメロス』―	単	2013年10月	Proceedings of JASFL　第7巻（日本機能言語学会）(pp.99-112)	中学校国語科教科書の教材として長年採用されている太宰治の『走れメロス』を取り上げ、選択体系機能言語学の方法によるテクスト分析を示しつつ、日本の教育制度を支える〈教育的イデオロギー〉が、教科書および「学習指導書」の記述にどのように映し出され、このテクストの文学的解釈にどのように影響しているかを批判的に検討した。
4.学校文法を考える―文節・修飾語・主語―	単	2013年03月	『日本語教育レポート』第11号（武庫川女子大学	「中学校学習指導要領・国語」に記載された「言語事項」（新学習指導要領における「言葉の特徴やきまりに関する事項）に関して、国語科用教科書の実際の記述内容を確認しながら、「文節」「修飾

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
			文学部日本語日本文学科日本語教育研究会）(pp.1-6)	語」「主語」という3つの事項が含む問題点を整理し、授業実践において利用可能な改善策を提案した。
5.文言テクストの2つの解釈―「漢文訓読」とプリンストン大学「古典中国語」	単	2009年10月	Proceedings of JASFL　第2巻（日本機能言語学会）(pp.1-14)	「文言」（文語中国語）に対して、日本が長い時をかけて考案・改良してきた構文分析法である「漢文訓読」（高校国語科教科書にまとめられたもの）と、現代アメリカの古典中国語学者による構造解釈（大学教材に結実したもの）を、選択体系機能言語学(SFL)の分析方法を「メタ分析」として用いながら、比較・検討した。結果として、双方の分析法の特徴が見出されるとともに、SFLの「メタ言語学」としての潜在力を確認できた。
6.漢語の構造と日本語における使用（１）	単	2009年03月	『日本語教育レポート』第7号（武庫川女子大学文学部日本語日本文学科日本語教育研究会）(pp.3-9)	現行の高校国語科教科書(北原:平成18)の記述と藤堂(1956[1987])による分類を参照しながら、漢語の基本構造を、漢語自体と、日本語の構成要素としての漢語という観点から再検討した。
7.漢文はどのように教えられているか―日本の中等教育とアメリカの入門教育―	単	2009年03月	『関西文化研究叢書』12（武庫川女子大学関西文化研究センター）(pp.171-186)	「漢文」が日本の中学校・高等学校においてどのように教えられているかを、アメリカのプリンストン大学で行われている古典中国語の教育と比較しながら捉え直し、それぞれの代表的なテクスト解釈の方法を具体的に検証して、日本の漢文教育の在り方を問い直した。
8.コンテクストの異同に基づくテクストの実践的理解―三省堂NEW CROWN ENGLISH SERIES 1を用いて	単	2008年11月	『関西文化研究叢書』10（武庫川女子大学関西文化研究センター）(pp.217-233)	武庫川女子大学関西文化研究センターのサブプロジェクト「英語学習における関西方言のもたらす効果」の一環として、現行の中学校英語科教科書を素材にしながら、学校英語教育において、学習者の文化的コンテクストおよび状況の認識の仕方を活用した授業実践を提案した。
9.日本の中等教育における漢文―アメリカの入門教育と比較して―	単	2008年11月	『関西文化研究叢書』8（武庫川女子大学関西文化研究センター）(pp.79-99)	日本の中学校・高等学校における漢文の教育法を、アメリカの大学における中国古典の入門用教材の記述を参照しながら検証し、国文法の係り受け、生成文法の構造記述、選択体系機能文法の結束性の概念を用いながら、よりよい漢文教育の在り方を提言した。
10.国語科教育における漢文	単	2008年03月	『日本語教育レポート』第6号（武庫川女子大学文学部日本語日本文学科日本語教育研究会）(pp.9-11)	現在の日本の中学校・高等学校の国語科の時間に行われている漢文教育のありようを検討し、そこに生じている問題点を指摘しつつ今日の生徒の実情に合った漢文教育のありかたを提言した。
11.日本語の人称代名詞―ウチ人称とソト人称	単	2007年03月	『日本語教育レポート』第5号（武庫川女子大学文学部日本語日本文学科日本語教育研究会）(pp.6-12)	日本語の人称代名詞および談話機能上同等の語類について英語の人称代名詞と比較したときに見出される特徴を、話し手／相手領域・直示性・省略可能性・指示対象の地位・公式性などの観点から通時的・共時的に考察した。
12.転成名詞の意味と「過程型」・「ビリヤードボール・モデル」	単	2006年03月	『日本語教育レポート』第4号（武庫川女子大学文学部日本語日本文学科日本語教育研究会）(pp.5-9)	いわゆる転成名詞の意味の類型に関する風間他(1993)の基礎的分類を参照しながら、転成名詞の動詞性・名詞性の変異を捉えた。さらに、選択体系機能言語学および認知言語学の観点から転成名詞がどのように捉え直されうるか、具体例を挙げながら論じた。
13.国・英対照による一般教育文法シラバスの試み	単	2006年03月	『中学校における国語科教育と英語科教育の一般教育文法シラバスの研究』(16530610)（平成16・17年度科学研究費補助金（基盤研究（Ｃ））研究成果報告書）(pp.1-	本研究は「中学校における国語科教育と英語科教育の一般教育文法シラバスの研究」の基礎研究として、現行の中学校国語科教科書と英語科教科書に文法関連事項がどのように扱われているかを調査し、対照言語学的立場によりながら、初学者にとって混乱を生じやすい語論・文論に関する国文法・英文法用語について、互いの見方を考慮した再整理と改訂の必要性を指摘した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
			32)	
14.第1次報告：授業における関西方言の使用状況	単	2006年03月	『関西文化研究叢書』1（武庫川女子大学関西文化研究センター）(pp.76-93)	「英語学習における関西方言のもたらす効果」研究プロジェクトの基礎研究として、実際に関西圏の中学校の英語の授業において関西方言がどのように用いられているかを調査した。その結果、話し言葉のインフォーマルなやり取りでは、教員・生徒の双方に関西方言が現れるが、書き言葉や話し言葉のフォーマルなやり取りでは、共通語が専ら使われるという「二方言併用」状況が認められた。
15.Construction of Figures（査読付）	単	2004年11月	JASFL Occasional Papers 第3巻第1号（日本機能言語学会）(pp.93-104)	選択体系機能理論の意味ベースに関して、事態(event)を表示し節(clause)のつながりとして具現されるフィギュア(figure)同士の関係にどのようなものがあるかを、実例によりながら分析した。その結果、フィギュア間の関係は複数の弁別的特徴によって大きく3つのパタンに分類できることを確認した。即ち、複数のフィギュアが1つの事態を表示し、F2がF1の言い換えや別の側面の記述となる《elaboration》、複数のフィギュアが複数の同時的事態を表示し、F2がF1に新たな情報を付け加える《extension》、複数のフィギュアが複数の連続的事態を表示し、F2がF1の時間軸に沿って展開する《enhancement》の3類である。
16.「意味としてのテクスト」の諸相―選択体系理論の観点から―（３）	単	2003年11月	『武庫川国文』第62号（武庫川女子大学国文学会）(pp.82-96)	選択体系機能理論の枠組みに基づいて、Halliday & Matthiessen（1999）で論じられているフィギュアと、そのつながりであるシークエンスの概念の整理、および、フィギュア間の論理－意味的関係である拡充の概念の再検討を通して、観念構成の視点から見て、シークエンスに、連続的ではない構造的構成性をも認めるべきことを主張し、これをテクストの具体例によって検証した。
17.「意味としてのテクスト」の諸相－選択体系理論の観点から－（２）	単	2003年03月	『武庫川国文』第61号（武庫川女子大学国文学会）(pp.68-78)	選択体系機能理論の枠組みに基づいて、Halliday & Matthiessen（1999）で論じられているフィギュアと、そのつながりであるシークエンスの概念の整理、および、フィギュア間の論理－意味的関係である拡充の概念の再検討を通して、観念構成の視点から見て、シークエンスに、連続的ではない構造的構成性をも認めるべきことを主張し、これをテクストの具体例によって検証した。
18.「意味としてのテクスト」の諸相－選択体系理論の観点から－（１）	単	2002年11月	『武庫川国文』第60号（武庫川女子大学国文学会）(pp.295-308)	選択体系機能理論の枠組みに基づいて、Halliday & Matthiessen（1999）で論じられているフィギュアと、そのつながりであるシークエンスの概念の整理、および、フィギュア間の論理－意味的関係である拡充の概念の再検討を通して、観念構成の視点から見て、シークエンスに、連続的ではない構造的構成性をも認めるべきことを主張し、これをテクストの具体例によって検証した。
19.How to grasp the general idea of a text without recourse to extratextual information（査読付）	単	2001年12月	『人文学会論叢』XXVI（人文学会）(pp.43-73)	選択体系機能言語学の枠組によりながら、テクストの概要を把握する方策を論じた。具体的には、科学的独話テクストを材料にしてテーマ―レーマ構造とキーワードの結束性を基に「談話機能的単位」を確定し、同単位の相互関係からテクストの全体構造すなわち概要の把握が可能であることを主張した。
20.体系機能文法によるテクスト分析の可能性－ESL教授用資料を用いて－	単	1999年11月	『武庫川女子大学文学部五十周年記念論文集』和泉書院（pp.25-37）	本稿は、選択体系機能言語学の枠組みに基づいて、ESL教授用資料にある平易な独白体書記テクストを分析しながら、この理論のテクスト形成的メタ機能である主題構造および主題相互の結束関係により、特定のテクストの全体構造を把握できることを主張し、ESLへの応用の可能性を示した。方法論として、テクストの意味的下位単位の「談話機能的単位」を設定、また、節レベルのタクシスとエクスパンションをこの単位へ適用した。
21.談話の展開における「観念構成的結束性」と書記テクストの分類（査読付）	単	1998年11月	JASFL Occasional Papers 第1巻第1号（日本機能言語学会）(pp.91-101)	本論は、佐藤（1998ａ）で提示した、先行テクスト情報の集約から生じる「観念構成的結束性」の問題、および、「継時性」と「述定性」という２つの『弁別特徴』による「物語」・「記述」・「手続き」・「議論」の４つの談話の型の特徴づけを、さらなる具体例を示すことによってより明確化した。
22.概念的結束性と談話の型	単	1998年02月	Mukogawa Literary Review No.34（武庫川女子大学英文学会）(pp.31-47)	本論では、まず、テクストの展開の中での先行情報の集約の問題をまとめ、次に、テクストの展開に伴うテクスト外部の指示対象の可変性、および同一指示対象に対する表現上の多様性という２つの問題意識に基づき、「継時性」と「述定性」という２つの『弁別特徴』を設定することによって、古くから言われている「物語」・

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
23.談話の展開の２つの型	単	1997年03月	『武庫川女子大学紀要』（人文・社会科学編）第44巻（武庫川女子大学）(pp.19-26)	「記述」・「手続き」・「議論」の４つの談話の型のそれぞれの特徴を明らかにした。テクストを過程と見る視点からすると、一般に、後続する節が先行する節の情報を累積・集約するパタンを繰り返しており、例えば、ある節の１つの名詞類が次の節の同一形式の名詞類によって指示される場合、先行節の情報全体が次の名詞類登場の前提になり、さらにその名詞類に取り込まれる。本論では、一般的な談話の展開のパタンと、さらに「叙述型テクスト」と「指示型テクスト」の展開のパタンを定式化することを試みた。
24.結束性と過程としてのテクスト	単	1996年03月	『武庫川女子大学紀要』（人文・社会科学編）第43巻（武庫川女子大学）(pp.9-15)	Beaugrande（1985）、Fillmore（1985）等のテクストを過程と見る大局的観点に基づきながら、Langacker（1987）、Croft（1991）の認知論的考え方を援用することで、「手続き」のテクスト等における同一の名詞句の、各の指示内容の漸進的変化を、格文法を応用した公式によって一般化した。また、「指示の連鎖」を用いて、個別のテクストにおけるこの同一名詞句の指示内容の変化を跡付け、これとテクストの全体的構成との関係を探った。
25.Condensation and Transformation of Information in Text（査読付）	単	1994年12月	『人文学会論叢』XV（人文学会）(pp.1-18)	Brown-Yule（1983）によるHalliday-Hasan（1976）の批判を元に、テクストを過程と見る視点から、特定のテクスト構成素（特に名詞句）が固有の語彙－文法的意味に加えて、先行文脈に関する指示的情報を累積・集約して保持しており、さらにこの情報が先行するテクスト内容の再解釈・再構成になっていることを、「手続き」のテクストにおける一連の同一名詞句の各の指示内容の変化を捉えることによって確かめた。
26.Discourse Topic and Left Dislocation	単	1991年03月	『武庫川女子大学紀要』 第38巻（人文・社会科学編）（武庫川女子大学）(pp.25-31)	Keenan-Schieffelin（1976a,b）の諸論文等を批判的に検討しながら、談話における「トピック」と「左方転移構文」との関係を明らかにした。具体的には、左方転移構文の冒頭の要素REFが談話に関して二重の役割を担っていること、従って「下位トピック」と「上位トピック」との区別が必要であることを論じた。
27.Givenness and Discourse（査読付）	単	1988年07月	『英文学誌』第29・30合併号（法政大学）(pp.1-15)	前回の論文(Sato,1987)で不十分であった情報の既知性(givenness)の諸階層の概念規定を、さらに新たな具体例を参照しながら、実際のテクスト分析に応用できるまでに確実なものとした。
28.Subsets of the Notion of ”Given/New Information” and Their Function in Discourse（査読付）	単	1987年01月	『立教レヴュー』第16号（立教大学文学部英米文学科）(pp.104-121)	Prince(1981)の、談話における後続語句の「既知情報／新情報」(given/new information)の分類を批判的に検討しながら、当該語句が、新情報を担わない同一指示のレベル0(coreferential)、非同一指示だが推測可能なレベル1(inferential)、推測不能だが聞き手の知識にあるレベル2(known)、聞き手の知識にないレベル3(unknown)の4段階に区別できることを、実際の使用例に基づき論証した。
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
２．学会発表				
1.「漢文訓読」を考える：「漢字」・「漢文」・“羅文英読”	単	2015年12月	武庫川女子大学言語文化研究所シンポジウム―言語文化の諸相：注釈、翻訳、翻訳語―（武庫川女子大学言語文化研究所）	「漢文訓読」という〈外国語解釈・翻訳システム〉を成り立たせている原理を、藤堂明保の「単語家族」の考え方に基づいた漢字の構成法の再検討によって明らかにするとともに、なぜ英語圏で「ラテン語文英語読み」（“羅文英読”）が成立しえないのかを論じた。
2.教科書は教育的イデオロギーを超えられるか―事例研究『走れメロス』―	単	2012年10月	第20回日本機能言語学会秋期大会	中学校国語科教科書の教材として長年採用されている太宰治の『走れメロス』を取り上げ、選択体系機能言語学の方法によるテクスト分析を示しつつ、日本の教育制度を支える〈教育的イデオロギー〉が、教科書および「学習指導書」の記述にどのように映し出され、このテクストの文学的解釈にどのように影響しているかを批判的に検討した。
3.選択体系機能言語学―導入と漢語・漢文分析への応用―	単	2010年04月	京都言語学コロキアム(KLC)	まず、Halliday(1994)、山口(2000)、龍城(2006)を紹介しつつ選択体系機能言語学の概要を説明し、次に、異文化コンテクスト・異言語テクストの受容の観点から、この理論の漢語・漢文分析への応用の例を提示した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
4.文言テクストの2つの解釈―「漢文訓読」とプリンストン大学「古典中国語」	単	2008年10月	第16回日本機能言語学会秋期大会	「文言」に対して、日本が長い時をかけて考案・改良してきた「漢文訓読」と、現代アメリカの古典中国語学者による構造解釈を、選択体系機能言語学(SFL)の分析方法を「メタ分析」として用いながら、比較・検討した。結果として、双方の分析法の特徴が見出されるとともに、SFLの「メタ言語学」としての潜在力を確認できた。
5.漢文はどのように教えられているか―日本の中等教育とアメリカの入門教育―	単	2008年09月	武庫川女子大学関西文化研究センター	日本の中等教育における漢文教育を、アメリカのプリンストン大学で行われている古典中国語教育と比較しながら、それぞれの代表的なテクスト解釈法を具体的に検証することによって、問い直した。
6.Japanese Personal Pronominals--their System and Instances	単	2006年12月	シドニー大学英語教育研究会	日本語の人代名詞および談話機能上同等の語類について英語の人称代名詞と比較したときに見出される特徴を、話し手／相手領域・直示性・省略可能性・指示対象の地位・公式性などの観点から通時的・共時的に考察した。
7.第一次報告：授業における関西方言の使用状況	単	2005年03月	武庫川女子大学関西文化研究センター	「英語学習における関西方言のもたらす効果」研究プロジェクトの基礎研究として、実際に関西圏の中学校の英語の授業において関西方言がどのように用いられているかを調査し、その結果を用例とともに報告した。
8.The Text and Context of Waka: Analyzing Traditional Japanese Poetry form the Systemic Functional Point of View	単	2004年09月	31st International Systemic Functional Congress (ISFC 2004)	選択体系機能言語学の立場から、和歌のテクストがどのような文化的・状況的コンテクストによって形成されているかを、具体例によりながら考察した。
9.層間とメタ機能間の不一致による意味生成―選択体系機能理論の視点―	単	2003年10月	関西言語学会ワークショップ「文法的比喩による意味生成をめぐって」	Halliday & Matthiessen (1999) に基づきながら、コンテクストにおける状況の意味層・語彙文法層への具現という縦軸の意味のしかたと、３つのメタ機能が互いに利用しあいながら同じ意味を社会的要請に応じた形式に作り上げていく横軸の意味のしかたを座標として、心的世界も含めた外界の概念化と言語化、すなわち「テクスト展開における意味生成」(logogenesis)の諸相をよりよく把握できるような枠組を提示した。
10.How to Upgrade Teaching ESL through science：A Successful Application of functional Grammar	共	1999年08月	12th World Congress of Applied Linguistics (AILA '99 Tokyo)	Oshima Makoto, Sato Katsuyuki, Tsukada Hiroyasu (共同発表者) まず、大島が、選択体系機能言語学の全体像について概説し、次に佐藤が、この枠組みに基づいて、ESL教授用資料にある平易な独白体書記テクストを分析しながら、この理論のテクスト形成的メタ機能である主題構造および主題相互の結束関係により、特定のテクストの全体構造を把握できることを主張し、ESLへの応用の可能性を示した。
11.概念的結束性と談話の型	単	1997年10月	第5回日本機能言語学会秋期大会	本論では、まず、テクストの展開の中での先行情報の集約の問題をまとめ、次に、テクストの展開に伴うテクスト外部の指示対象の可変性、および同一指示対象に対する表現上の多様性という２つの問題意識に基づき、「継時性」と「述定性」という２つの『弁別特徴』を設定することによって、古くから言われている「物語」・「記述」・「手続き」・「議論」の４つの談話の型のそれぞれの特徴を明らかにした。
12.概念的結束性と談話の型	単	1997年09月	大学英語教育学会関西支部談話分析研究会	本論では、まず、テクストの展開の中での先行情報の集約の問題をまとめ、次に、テクストの展開に伴うテクスト外部の指示対象の可変性、および同一指示対象に対する表現上の多様性という２つの問題意識に基づき、「継時性」と「述定性」という２つの『弁別特徴』を設定することによって、古くから言われている「物語」・「記述」・「手続き」・「議論」の４つの談話の型のそれぞれの特徴を明らかにした。
13.談話の展開の２つの型	単	1997年03月	人文学会（第31回）	テクストを過程と見る視点からすると、一般に、後続する節が先行する節の情報を累積・集約するパタンを繰り返しており、例えば、ある節の１つの名詞類が次の節の同一形式の名詞類によって指示される場合、先行節の情報全体が次の名詞類登場の前提になり、さらにその名詞類に取り込まれる。本論では、一般的な談話の展開のパ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				タンと、さらに「叙述型テクスト」と「指示型テクスト」の展開のパタンを定式化することを試みた。
14.コヒージョンと概念形成	単	1994年12月	大学英語教育学会(JACET)関西支部談話分析研究会	Beaugrande（1985），Fillmore（1985） 等のテクストを過程と見る大局的観点に基づきながら、Langacker（1987），Croft（1991）の認知論的考え方を援用することで、「手続き」のテクスト等における一連の同一名詞句の、各の指示内容の漸進的変化を、格文法を応用した公式によって一般化した。また、「指示の連鎖」を用いて、個別のテクストにおけるこの同一名詞句の指示内容の変化を跡付け、これとテクストの全体的構成との関係を探った。
15.テクストにおける情報の集約と変容	単	1994年11月	第2回日本機能言語学会(JASFL)秋期大会	Brown-Yule（1983）によるHalliday-Hasan（1976）の批判を元に、テクストを過程と見る視点から、特定のテクスト構成素（特に名詞句）が固有の語彙－文法的意味に加えて、先行文脈に関する指示的情報を累積・集約して保持しており、さらにこの情報が先行するテクスト内容の再解釈・再構成になっていることを、「手続き」のテクストにおける一連の同一名詞句の各の指示内容の変化を捉えることによって確かめた。
16.テクストにおける情報の集約と変容	単	1993年12月	立教大学英文学会	前回の口頭発表を前提に、代名詞及び定名詞句の、テクストの展開に伴う指示内容の変容を検討した。
17.情報の集約と談話トピック	単	1993年09月	人文学会（第27回）	Hallidayらsystemic functionalistsの‘cohesion’の考え方に対するBrown & Yule（1983）の批判を踏まえて、代名詞及び定名詞句のテクスト内照応の諸相を検討した。具体的には、一連のＮＰの語形上の同一性にもかかわらず、テクストの展開に伴って、その意味内容が漸次増大し、かつその表象が変容していくことを論じた。
18.マルティネの二重分節理論再考	単	1988年05月	日本記号学会第8回大会	プラーグ学派に発しながら英米系とは別の方向で独自の機能主義を打ち立てたフランス学派のマルティネの言語論の支えである二重分節理論を、ソシュールの記号の概念を参照しながら再検討し、言語の記号としての性質と、これとの音韻論及び意味論の分析方法との関係を論じた。
３．総説				
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.選択体系機能言語学の3つのメタ機能によるテクスト例「おうむのるすばん」の分析	単	2019年03月	『言語各研究レポート』第3号（武庫川女子大学文学部日本語日本文学科言語文化研究会）	本稿は、選択体系機能言語学(SFL)の理論的枠組みに基づいて、いわゆる〈物語文〉の分析を試みたものである。具体的には、SFLの説く3つのメタ機能(metafunctions)の観点から、物語文をつくる節(clause)それぞれの構成要素の機能を認定し、さらにジャンル構造(generic structure)と結束関係(cohesion)の考え方を用いて、物語テクストの全体的構成を把握し、テクスト解釈に繋いでいる。(pp.1-10)
2.詩の翻訳における音と意味―上田敏の「落葉」と堀口大學の「秋の歌」―	単	2018年03月	『言語学研究レポート』第2号（武庫川女子大学文学部日本語日本文学科言語学研究会）	本稿は、上田敏の訳詩「落葉」および堀口大學の「秋の歌」を、原詩であるベルレーヌ(Verlaine)の「秋の歌」(Chanson d'automne)と比較し、その音節・韻律と意味との関係性を考察しながら上田、堀口の翻訳の工夫のあとをたどったものである。(pp.1-6)
3.原曲と訳詩のテクスト分析―「愛の賛歌」―	単	2017年03月	『言語学研究レポート』第1号（武庫川女子大学文学部日本語日本文学科言語学研究会）	本稿は、代表的なシャンソンの1つである「愛の賛歌」(Hymne a l'amour)を分析事例として、〈文学的ジャンル〉のサブタイプである〈歌詞〉のテクスト分析を、原曲とその翻訳という観点から論じたものである。(pp.1-9)
4.韓国語母語話者に対する標準日本語音声習得のための注意点	単	2015年03月	『日本語教育レポート』第13号（武庫川女子大学文学部日本語日本文学科日本語教育研究会）	本稿は、日本語教育実習の現場経験を踏まえて、韓国語母語話者の多くが陥る音声面の問題点を指摘し、その具体的な改善策を端的に提示した。(pp.1-2)
5.ブラウン・ユール『談話分析』抄訳	単	2005年03月	『日本語教育レポート』第3号（武	Gillian Brown and George Yule (1983), Discourse Analysis, Cambridge U.P. の第1章前半部分の抄訳。「談話」の機能を「情報

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
(1)			庫川女子大学文学部日本語日本文学科日本語教育研究会)	伝達的(transactional)」と「相互作用的(interactional)」に区分し、音声言語と書記言語の関係を論じている。(pp.4-7)
6.ハッサン論文抄訳：「何が起きているか」―言語における動的な見方―	単	2004年03月	『日本語教育レポート』第2号（武庫川女子大学文学部日本語日本文学科日本語教育研究会）	Ruqaiya Hasanの論文集 Ways of saying, ways of meaning (C. Cloran, et al. eds., London: Cassell, 1996)から 'What's going on: a dynamic view of context in language'のうち前半部分の抄訳。ハリデー(M.A.K.Halliday)の「状況のコンテクスト」の解釈を提示している。(pp.3-4)
7.ソシュール『一般言語学講義』（抄訳）	単	1992年03月	Mukogawa Literary Review No.28（武庫川女子大学英文学会）	Ferdinand de Saussure: Cours de linguistique generaleのTullio de Mauroによる校注版(Paris, Payot, 1972)の第1部第1章の第1節と第2節、および第2部第4章の第1節と第2節―記号の性質と恣意性の原理を論じた本質的な部分―を翻訳したものである。(pp. 133-147)
６．研究費の取得状況				
1.改良学校国文法を用いた授業実践による中学生の論理的思考力と伝え合う力の涵養	共	2017年4月～2023年3月	日本学術振興会平成29・30・31年度科学研究費補助金（基板研究(C)）（研究課題番号：17K04829）	研究代表者：佐藤勝之、研究分担者：村山太郎 本研究は、言語学・日本語学研究の知見に基づいて、中学校国語科教科書に記載された学校国文法の問題点を具体的に指摘し総括した上で、現行の学習指導要領に従い、教科書および現場の教育との間に出来るだけ齟齬を来さない形の学校文法改良案を提示し、これによって生徒の日本語に対する客観的理解を助けるとともに、彼らの文章読解力および作文能力の向上に役立たせ、ひいては日常の言語活動の改善を図ることを目的とする。
2.中学校における国語科教育と英語科教育の一般教育文法シラバスの研究	共	2004年04月～2006年03月	日本学術振興会平成16・17年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）（研究課題番号：16530610）	研究代表者：市川真文 本研究は、現行の中学校国語科教科書と英語科教科書に文法関連事項がどのように扱われているかを調査し、対照言語学的立場によりながら、初学者にとって混乱を生じやすい語論・文論に関する国文法・英文法用語について、相互の見方を考慮した再整理を行い、一般教育文法とこれに基づくシラバス（授業細目）を提案するものである。

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2017年07月，2017年10月	（一般財団法人）短期大学基準協会　評価員
2.2008年～現在	日本機能言語学会　学会誌編集委員
3.2006年04月～2007年02月	オーストラリア・マクォーリー大学（Macquarie University）客員研究員
4.2004年08月	国際機能言語学会(International Systemic Functional Linguistics) 第31回大会準備委員
5.1999年～2008年	日本機能言語学会　理事 関西言語学会